

55歳のつぶやき

在京飯田高校同窓会の幹事学年は55歳。社会人になったころ、55歳は定年を迎える年だった。今の時代、まだまだ世の中を引っ張っていかなくてはいけない世代の同窓生たちは、どんなことを考えているのだろうか。

高32回生 10人のつぶやき

■音楽を通して、自分にできること

米ソ冷戦の時代、世界平和はいかにして実現できるかと討論したのは飯田高校の文化祭での懐かしい思い出。自分のことなどそつちのけで他人のため世の世を議論できるのは、若者の特権かもしれない。しかし、世の中に反抗的な若者が、大人になるにつれ世間の荒波を器用に乗りこなす保守的な人間に変わっていくのも、世の習いである。

人生は歳を重ねるごとに、自分や身近な人の命の深さに愛おしさを感じるようになってくる。その重さに早く、そして深く気づいた者こそ、少しでも世のため他人のためになる仕事ができるのではないだろうか。私自身は音楽に携わっている者だが、これからもそんな人の心が音楽に表せられたら、と考えている。

●木下岳文 飯田市出身 音楽講師

■高32回幹事長55歳！ 走る!!

我が故郷売木村はマラソンの村として有名になっている。愛知県の最高峰である茶臼山に隣接し、海拔850mの立地で、高校・大学・実業団の合宿地として多くのランナーが訪れているのだ。ウルトラマラソンランナーの重見高好さんが地域おこし協力隊として赴任し、各大会での活躍と、NHK「応援ドキュメント明日はどっちだ」に何度も特集されたことにより、より知名度が上がった。

その売木村の活動より2年早くランニングを始めた。最初から競技志向で行くと決め、半年後にハーフマラソン、1年後にフルマラソンを走り、以来定期的にマラソン大会に参加している。日本一過酷なマラソン大会と言われる「うるぎトライアルRUN」にも毎回参加しているが、これは、累積標高1700m、大小8回の峠越えのあるフルマラソンだ。

昨年の大会、最初の峠は急坂も走って越えたが、次の峠から歩いて登坂、30kmで痙攣したが、無理を押しして走り、40kmでまた痙攣、しかし最後の500mは全速力でゴールした。35位、55歳としてはまあまあかな、と思う。翌日は恒例の、90歳になる親父とのゴルフ、お互いに無理しすぎか、と思わないでもないが(笑)。……。高校・大学・体育会ヨット部でも一緒の片桐弘志君とは、今もマラソン大会「サブ3:5(3時間30分切り)」を目指して競っている。

今年の決戦は10月8日だ!

●松村尚哉 売木村出身 会社役員

■ポジティブシンキングで生きよう!

この歳になると、若い頃と違って疲れやすい、物忘れがひどくなる、イライラする…等々共感される55歳、多いのではないだろうか。だからこそ、気をつけていることがありません。「ネガティブワードは使わない」。愚痴を言ったり、過去を悔んだり、悲観的になったりすればきりが無い。何事もポジティブに前向きにとらえるのです。「この経験はきつと役に立つ」今はこれがちょうど良かったこと。「次はちょっと変えられる余地がある」。考え方を変えようと、ストレスも減ります。

健康長寿のお年寄りには、ストレスをためず笑顔ですよね。心身ともに健康であるために、ポジティブシンキングで生きましょう!

●西岡(旧姓・中平)美由紀 飯田市出身 製薬会社勤務

■再会して感じた郷土愛、母校愛

昨年11月、在京同窓会の次年度幹事として総会にお声掛けいただいた後、2次会で同期と再会しました。いまだ夢を追いかけている人、大病から復活し日本中を飛び回っている人、自動車事故で生死をさまよった人、転勤で日本全国を転々としてき

た人、大過なく子どもを育て上げた人など、とりとめもない思い出話とともに、互いの半生を飯田弁交じりで語り合いました。

飯田線・中央線と乗り継いで上京し、必死で生きてきたんだなあ、とそれぞれの人生の重みを感じたと同時に、青春時代を共に過ごした故郷と母校を愛する気持ちを

■子育て支援で伝えたいこと

先日、披露宴で渡す娘に向けた饞(はちま)紙の手紙を書きながら、55年も生きていると、私もいろいろな経験をしてきたなあとしみじみ思いました。子どもたちもやつと自立して、未来へ向かって歩き出したし、次に考えるのは、再び、自分の今後です。これからは人のためになることをしたい。辛いこともありました、最高に楽しかった子育て経験を活かし、子育てに困っている人を助けたい。そしてできれば子育ての楽しさも伝えたい。それが55歳からの私の挑戦です。

今年は、在京同窓会の幹事学年で、思いがけず同級生と再会できたことは、大きな喜びでした。数年前から、女子の同級会は始めていましたが、今、一緒に高校時代を過ごした男子やほかのクラスの同期生たちと幹事会を通じて楽しい時間を過ごしつつ、プラスαの思い出を作っているところです。

●田中(旧姓・増井)八重子 飯田市出身 主婦

感じることができました。

今年の総会では、伊那谷の象徴の風越山と校章をあしらったTシャツを作成販売します。同窓生の更なる郷土愛、母校愛を醸成し、故郷並びに母校飯田高校の発展に繋げられることを願っています。

●吉澤広和 飯田市主税町出身
スポーツメーカー勤務

■金魚の子はカエルに進化？して…

十数年間、飯田高校で生物の教師をしていた伊藤文男（あだ名は金魚！）の息子です。現在は大学で分子生物の講義をし、カエルを中心として脊椎動物の性と変態の分子・発生・進化学的研究を行っています。

GO GO！の55歳になつて振り返ると、自分が15歳のときに母を、30歳のときに父を亡くし、自身も生死の狭間を何度か経験して、今、七難八苦の夢の跡のような日々です。が、飯田の象徴の風越山（かたがひのやま） (the mountain over IDA's winds) の麓で自然と戯れ、somethingを夢想し、生命の不思議を感じた飯田時代をベースに、今は、wonderlandの学び舎と「う地」で、若者と共に、自由な風の中で研究できているこの瞬間の幸せを感じております。

昨年、『稲穂』で在京同窓会顧問平田達先生の「つぶやき」を読んで、月並みな言葉ですが感銘を受けました。生命科学の進展とAIなどにより、更に変動・変容していくこの人間社会において、DNAを超越する人間の原点ともいふべき、「優しさ・懐かしさ」を持って言動されている飯田高校先輩の人間弁護士、平田先生に、最大の respect と深遠なる感謝を申し上げます。

●伊藤道彦 飯田市出身 北里大学准教授

■シモキタ、よき時代の市場の集大成！

豊丘村からアーティストを目指して上京し、下北沢に居を

構えて37年。今年は、その多くの素敵なご縁をいただいで集大成をした。6月17、18日、クローズする下北沢駅前市場へのオマージュとして、戦後70年にわたる変遷の写真展と、下北沢にゆかりのあるミュージシャンたちのライブを企画し、駅前の広場で開催いたしました。

文化的なイベントとして『さよならマーケット』がありがとうマーケット』は東京新聞、朝日新聞、読売新聞とメジャーな全国紙が大きなスペースで記事を挙げてくれました。梅雨時の屋外イベントでしたが、天候が大荒れすることもなく、プロデューサーとしてホッと一息。ポップ・テイランのノーベル賞受賞で脚光を浴びた中川五郎さんがマーケットへのオマージュと共に今の社会や政治に対して強いアピールを歌い、シモキタらしいエンディングとなりました。

●下平憲治 豊丘村出身 歯科医・ロックバー経営

■世界中の子どもの笑顔よ、永遠に

初めて外国に行ったのは、1986年に卒業旅行で行った中国です。当時はまだ多くの人が人民服で、砂糖きびをかじっては、その食べかすを路上に平気で吐き捨てているような国だったのですが、今やGDP世界2位の大国です。まさに隔世の感があ

ります。

就職後も、仕事で複数の国を訪れました。その中には、'86年当時の中国よりもっと貧しい国も含まれます。海外での楽しみは名所、料理など人それぞれと思いますが、私は、子どもの笑顔を見るのがいちばん好きです。とりわけ親と一緒にいる時の子どもの安心しきっているというか、甘えてい

るといふか、とても素直な笑顔は、アフリカでも欧米でも共通です。そんな時には何故か、地元の八幡様の夏祭りに両親に連れて行ってもらった50年前の幼い自分が重なります。そして、そんな小さな幸せな時間などの国でも、いつまでも続いてほしいと思うのです。

●藤本敏文 飯田市松尾出身 気象庁勤務

■同・級・生 十首

賑やかな陽だまりのやう同年の友らと語る四十年経て

アルバムとかわるがわるに比べ見る

君の歳月の満ちてゐるらし

ひと息に歳月またぎ集ふ日のやがて来ること思わざりしを

（このこと卒業アルバムめくるたび

放課後の声聞こえくるなり

市街地へ並んで歩きし道の端の

エノコログサのあえかなる白

珈琲に砂糖もミルクも入れおろし十六歳の背の薄さよ

夏の部室ぱちりぱちりと駒を置く朝日に透ける君の指先

今だから話せることもあるだらう

タイムカプセルに仕舞ひし過去を

在りし日の高松パンのほの甘さ

覚えているよこの先もすつと

同・級・生とふ言葉の響きじんわりと

温き思いの込み上げてきぬ

●下平紀代子 松川町出身 編集者・帽子作家

■加納君のこと

50歳を前にして、同じJ組だった加納恒男君は亡くなった。その年、彼から年賀状が届かなかった。この歳になると年賀状が届かないと胸騒ぎがする。案の定、1月中旬に奥さんから、加納君が年末に亡くなった旨の報せが届いたのだ。新盆に伊藤道彦君と、飯田の彼の実家を訪ねると、ご母堂はこちらが恐縮するほど感謝の言葉をかけてくださった。優秀な脳外科医だった彼が、皮肉にも自身が脳腫瘍となり自らのCTスキャン映像を確認し、死を覚悟したそうである。毎年、年賀状で、今年は会って呑もうと互いに言い続けているの、この別れだった。

これまでも何度か、亡くなった友人宅を訪ねては、残されたご両親の涙を見てきたが、いつもいたたまれない気持ちになる。会える時には迷わず会っておくべきだとつくづく思うこの頃である。

●遠山邦明 南信濃村（現・飯田市）出身 自営業